



連続孕ませ・出産

強制絶頂

拡張・子宮脱

巨人・触手姦

魔族に墮とされた聖女姉妹

～呪いで聖なる力を繁殖の力へ歪められた修道女姉妹～

基本CG17枚
総枚数678枚

NTR要素・淫紋・ポテ腹あり

人間と魔物たちが戦争を始め、鎬を削っていた時代…
その中でも、わずかに戦乱を免れた国があった。

女神アルテリアに愛されたというこの小国もその一つで、
強い結界で外部の魔物を寄せ付けないとされている。

その為、女神を崇める宗教が盛んで、
その中でも強い信仰心で特別な回復魔法の加護を得た
癒やしの聖女と呼ばれる修道女たちは、
医者が少ないこの国でも重宝されていた。



「それじゃ行ってくるわ、留守を頼むわね。アルド。」

「村長さんがお世話に来てくれますから、ちゃんと言う事を聞くんですよ。」

「うん、わかった...。」

この2人は、孤児の僕を引き取って育ててくれた姉妹のシスター、エミリアとミルカだ。

この村の教会を2人で運営している。

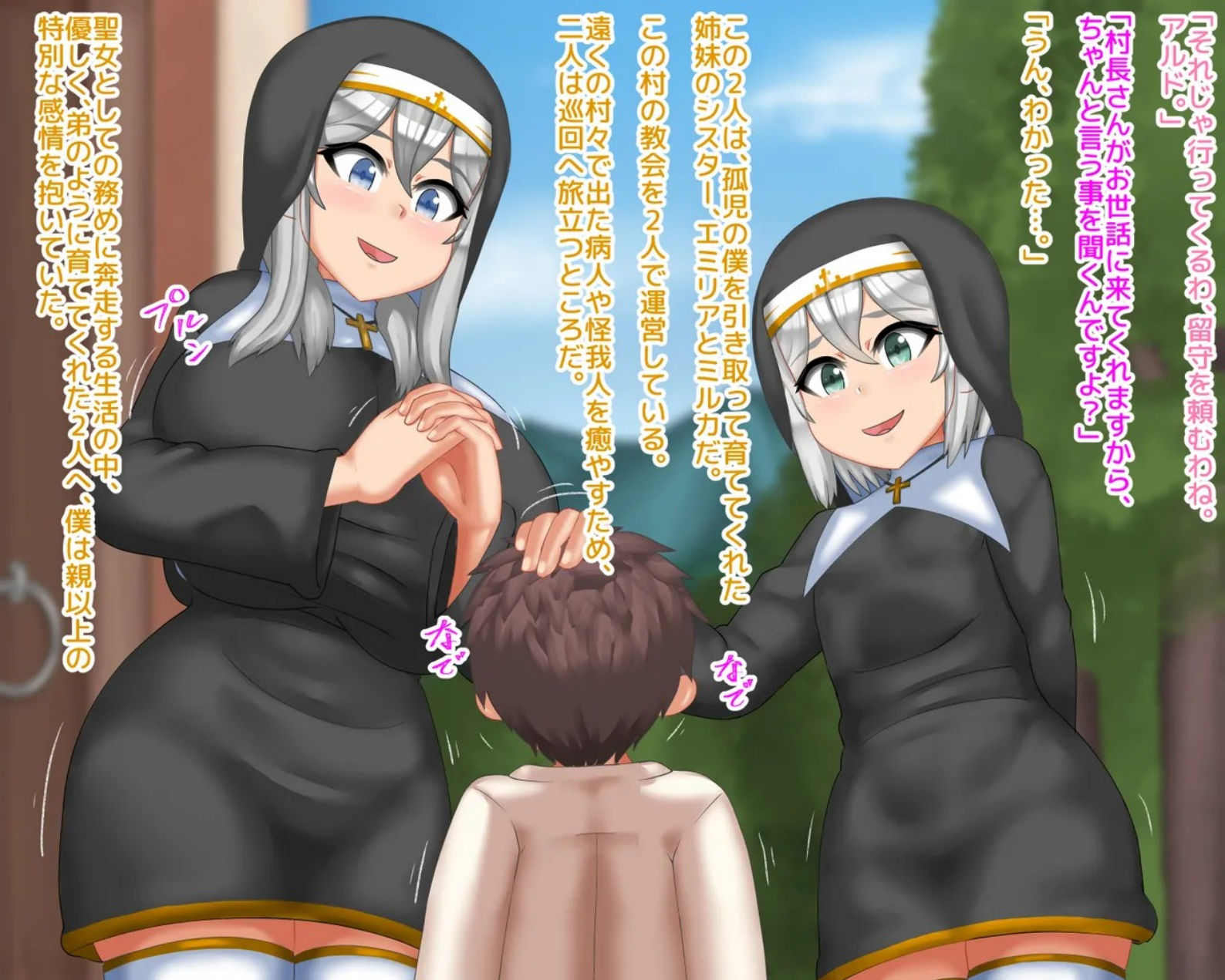
遠くの村々で出た病人や怪我人を癒やすため、二人は巡回へ旅立つところだ。

聖女としての務めに奔走する生活の中、優しく、弟のように育ててくれた2人へ、僕は親以上の特別な感情を抱いていた。

プリン

おぞ

おぞ



「エ、エミリアお姉ちゃん、ミルカ…。
やっぱ、行かないでよぉ…！
何だが、嫌な予感があるんだ…！」

「もう…！
アルドは甘えん坊ね。
そんなに私達と
離れたくないの？」

「優しい子ですから、
心配してくれているんですよ。」

大丈夫ですよ、今回は少し長いですが
それでも半年ほどで
帰ってこれるでしょうから。」

「ごめんなさいわ…」

「んん…」

「んん…」

魔物が出ず、野盗もないこの国では
女の子二人の旅もそれほど危ないものじゃなかった。
第二、苦しんでいる人たちをこのふたりが放っておけるわけない。
でも…。
二人は僕を慰め、強く抱きしめてから旅立っていった。



まさか、あの子の予感が的中するなんて…
巡回先の村は荒れ果てて、住人は残っておらず、
私達はそこにいた魔物の群れに囲まれました…。

「よく来たな！
聖女さんがた、
歓迎するぜ！」

「な、なんで……？
魔物がこんなに……！」

「ハロ……」

「へへへ、こりゃあ相当の当たりだぜ。
さっさとやっちまいてえな。」

「バカ、魔神様の面通しが
済んでからだろうが！」

「この国には、結界で魔物は入ってこれないはず……
なの……」

「ハロ……」



「そう…こやつらは我が封印から目覚めた時に、手下として創り出したのだ。」
「あなたは…!?」

それは見たこともない、禍々しい魔物…というより、
段違いに大きな魔力を持った、邪神…でした。

「忌々しい女神にこの地へ封印され、幾星霜…
櫛を外す為に魔力を使いすぎた…」

我には…分身を生み出す女が必要なのだ。
それも、そなたたちのような特別な聖女がな…。」

まさか、国の外ではなく内部にこんな恐ろしい存在がいたなんて…

「ま、待つてください！
妹は、ミルカは逃がして…
私の身体なら、捧げます、から…!」

「お、お姉ちゃん…!」

元より戦う力も意思も持たない私は、
ただ許しを請うより他にありません…。

ムン

ズズ



「ならば、そうだな...。まず、腹を見せてみる。」

「お、お腹...」

「なんでよお...」

「いいからさっさとその腹出しやがれ！襲っちゃうぞ！」

「いいからさっさとその腹出しやがれ！襲っちゃうぞ！」

「私達は、仕方なく言う通りになります...」

「これだ...この力...」

「触手が、下腹部へと伸びてきて...」



「ハル」

「ユ」



「ひーっ」

お腹の、奥…
内臓が、一瞬まるで熱湯のように
熱くなりました…

「な、何よ!?
あたしたちに
何したの!?!」

「呪いだ…
聖女の方を反転させる呪い…」

ビクッ

ビクッ

ズグッ

ズグッ

「へへへ：
ボルガルア様、そんな
こいつら連れてっていいですかいらマ」

「うむ。
二人のどちらかを私の伴侶とする。
ふさわしい身体となるようにせいせい耕しておけ。」

その為の呪いは刻んでおいた。
頼んだぞ、オークども。」
「へへっー任せてくださいよー」

「そんなーやめてー！
ミルカは見逃してくださいー」

私の懇願もむなしく、ふたりとも廃村の荒れ果てた家屋へ
連れて行かれました…。



「ああん？
さつきは妹の代わりになるだの
立派な事言うてた割に
この手は何だよ？」

「ま、待つてください！
せめてその...
心の準備を...！」

フッフッフ...

苦しむ人を助けて、
感謝される...
私には善意の中で生きてきた

ス...

カッパッ

アッパッ



「グヘヘ!」
未経験の聖女ま○こ
だもんなあ?
俺のこのデカいブツを
突っ込んでみるの怖
いんだろ?」

「い、言わないで
ください!」

このような悪意を
向けられる事に、
慣れていませんでした...

「ググ!」

「ッ!」

「アッ!」



オークは、
私の股いもを、
そり太いものを
の付けてみます…。

「おおっ、しつかり
これが処女膜の
感触があ？
今のうちにさよなら
しとけよ？」

ムムム！

ズ

ズ

ムム。

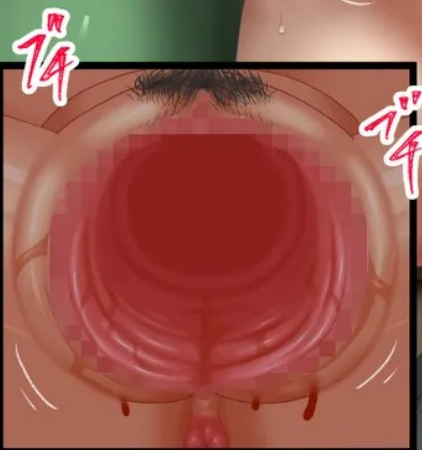


オークは私の非力な抵抗など
ものともせず、
その男性器をねじこんで
きました...!

きゃあぁぁ!!

「つひひ、
初物いただき...」

胸を二つに裂かれるような
鋭い痛みと、内臓を圧迫される
苦しみが同時に押し寄せてきました...。





「うう...!
な、中に...!」

「発目の種付けだ!
しつかり飲み込みやがれ!」

「うう...!!」

ドッポッ

ドッ

ドッ

ドッ

「へへ、腹が膨れる
くらい出してやっただぜ。
かきなり孕んじまったぜ。
聖女さまよお？」

「うぐうっ……
か、神よ……
おゆるしくください……」

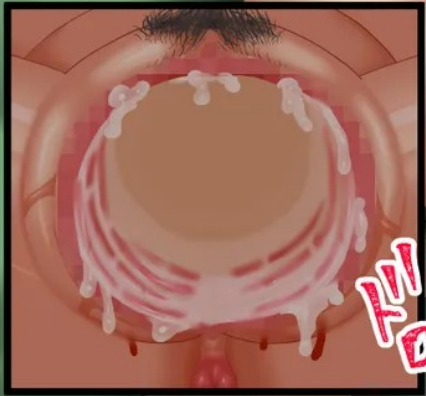
「ミルカも、
こんな恐ろしい事を
されているのでしょうか……。
無力な姉で、
ごめんなさい……」

ドクドク……

ヒュー……

ガッ……

ドクドク……



「フヘヘ...
聖女さまのま〇こは
小便臭えぜ。」

「むぐぐ...
薄汚い口を離さないよ、
この変態オーク！」

「なんだよう？
やけど元気だならうわ。」

あたしは縛られて、
頭を踏まれながら、
乱暴されたわ...

本当は、怖くて...
おしっこ...
漏らしそうだったけど...



ゲゲ..

ん...!

へ...
へ...
へ...

ぢわ..

「あぁ？
せうかく入れやすく
濡らしてやっつてんのに！
いきなり突っ込んでやるうかー？」

「やれるもんなら
やってみなさいよ！
この変態！」

「あんなち下衆に
屈したりしないからー」

「だそつだ。
やっつてやんな。」

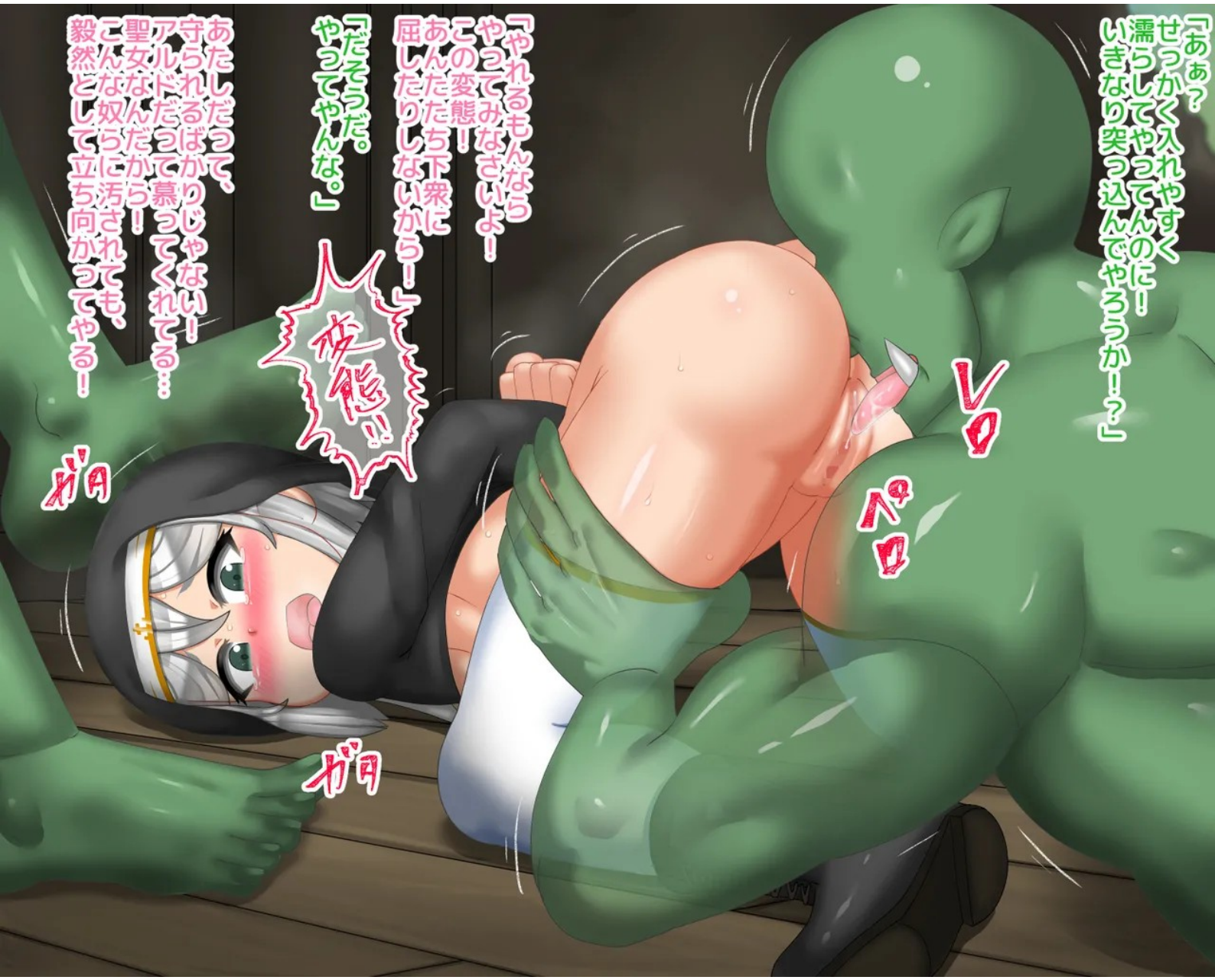
変態!!

「あたしだって、
守られたいだけ、
アナルだって慕って
聖女なんだから！
ごんならだろ！
毅然として立ち向かっても、
殺らなから！」

ガァ

ガァ

V
V
V



「うわああああっ……
抜けてっ！
ぬいてよあつ！
中に、ださないでえっ！」

「へへ、わりいな。
もう出ちまったよ。」

トビユッ

うわあああ！！





「三つははあつー！
聖女さまはケツも
極上の穴してやがるぜ！
褌が吸い付いてきやがるー！」

「オークたちは、代わる代わる私を犯すうちに、
不浄の穴にまでも挿入し始めました！」

「ちっ！
まだ終わんねえのか？
もう待てねえぞ！」

「わん！！」

「ガッホッ」

「ガッホッ」

「ガッ」

「セーラーさんいいが！
無駄にでけえ乳で
抜かせてもらっせー」

彼らはまるで
性欲の化身のように…
私の全身を性玩具として
弄びます…。



わや…!

ムン!
ムン!

パン!

グワッ

グワッ

グワッ

パン!

「やべえー
もう出ちまうー」

「俺もだー
ケツの中に入れてやせやせー」

私達は、
敬虔な信徒であること
努力してきたはず……

神よ、これは試練なのでしょーうか？

アッ！！

パン

パン

アッ

アッ

アッ

アッ



女神さまを疑うなかと、
三ルカやアルドへ教え込んできた私が、
今、何を...？

熱い精液を腸内と乳房へ
注がれ、激しい恥辱と苦痛の中で
私の思考はだんだんと
ぼやけていきました...

ガビュッ

ああ！

ヒグッ

ビュッ
ビュッ
ビュッ

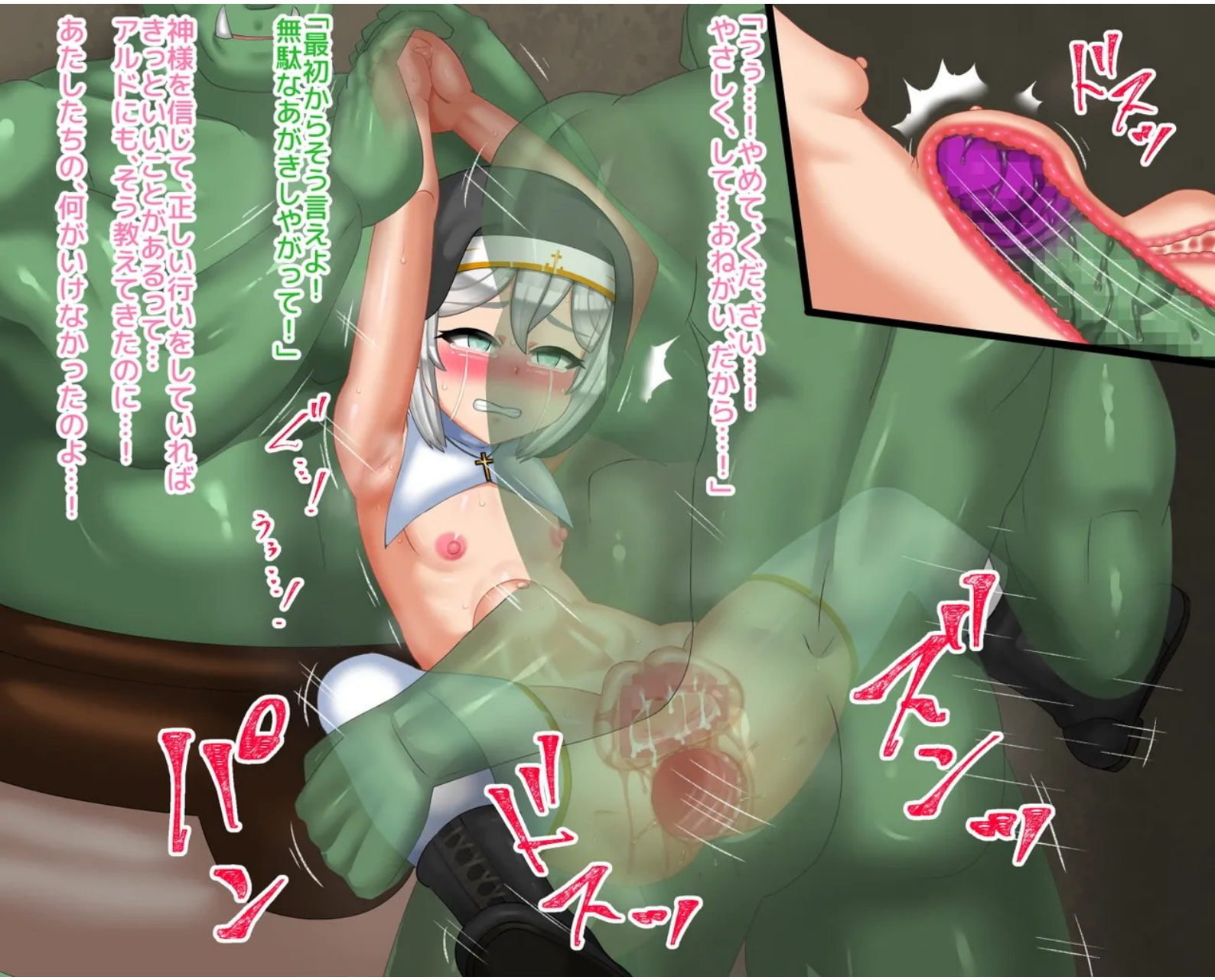
ムッ



「態度は最悪だがケツは素直だな！
すんなり入るじゃねえかーギヤハハー」

「くう……！
地獄に、落ちる……！」





「うう……やめてください……
やさしくして……おねがいだから……」

「最初からそう言えよ！
無駄なあがきしやがって！」

神様を信じて、正しい行いをしていれば
きつといいことがあるって……
アルドにも、そう教えてきたのに……
あたしたちの、何がけなかったのよ……！

パン

グッ

グッ

グッ



「素直になれたご褒美に
優しく中出ししてやるよー」

「やっと終わったかよ？
次は俺な。」

あやし達の苦しみは、その後も
長い時間続いたわ…。

ガッ!!

ガッ

ドゴ

ドゴ

ドゴゴゴ

ドゴ

「へへ、きったねえな。やりすぎだろ。」



「何しろこの村娘とは違う
聖女の姉妹だぜ？
チ○ポにも気合が入るってもんよ。」

「ガハハ！ちげえねえ！」

オーク達に散々に犯され、
そのまま床に転がされた
私達は、耐えきれないほどの
屈辱と苦痛の中……

一瞬、心に女神様を疑う心が芽生えました。

ガッ



「どうして……？
神よ、私たちが…何をしたらと言ったのですか……？」

トロ……

ガッ

（何が神様よ……！
なんの助けにもならないじゃない……！）



そのんな私たちのお腹へ、
呪いの紋章が一つ、
光りながら現れました……。

ズズズズ

「おー見ろよ！
例のやつが出てきたぜ！」



紋章が現れた途端、感じていた苦痛が裏返るような快感へと変わりました...

私達は、お腹へ溜まった精液を噴射しながら初めて味わう絶頂という感覚を噛みしめるのでした...



アハハ

おほおほ

おほおほ

ズン

おほおほ



後から知った事ですが、
邪神にかけた呪いは、
快楽に溺れ、信仰心が薄れるほど聖女のカが汚れて
魔物へ近づき、紋章が増え、いく...というものでした。

そしてそれは紋章が増えるたびに、
魔族と交わる快感が上がる淫蕩の呪いだったのです...

その後、彼らは半壊した村で私達を娼婦のように使い続けました…。



「どうだ？
聖女の姉ちゃん。
魔族と抱き合つて
やりまくるのもいいもんだろ？」

「何を……！
こんな罪深い行い、
背筋が寒くなるだけです……！」

わっ

ううう！
ううう！
ううう！

わっ

わっ

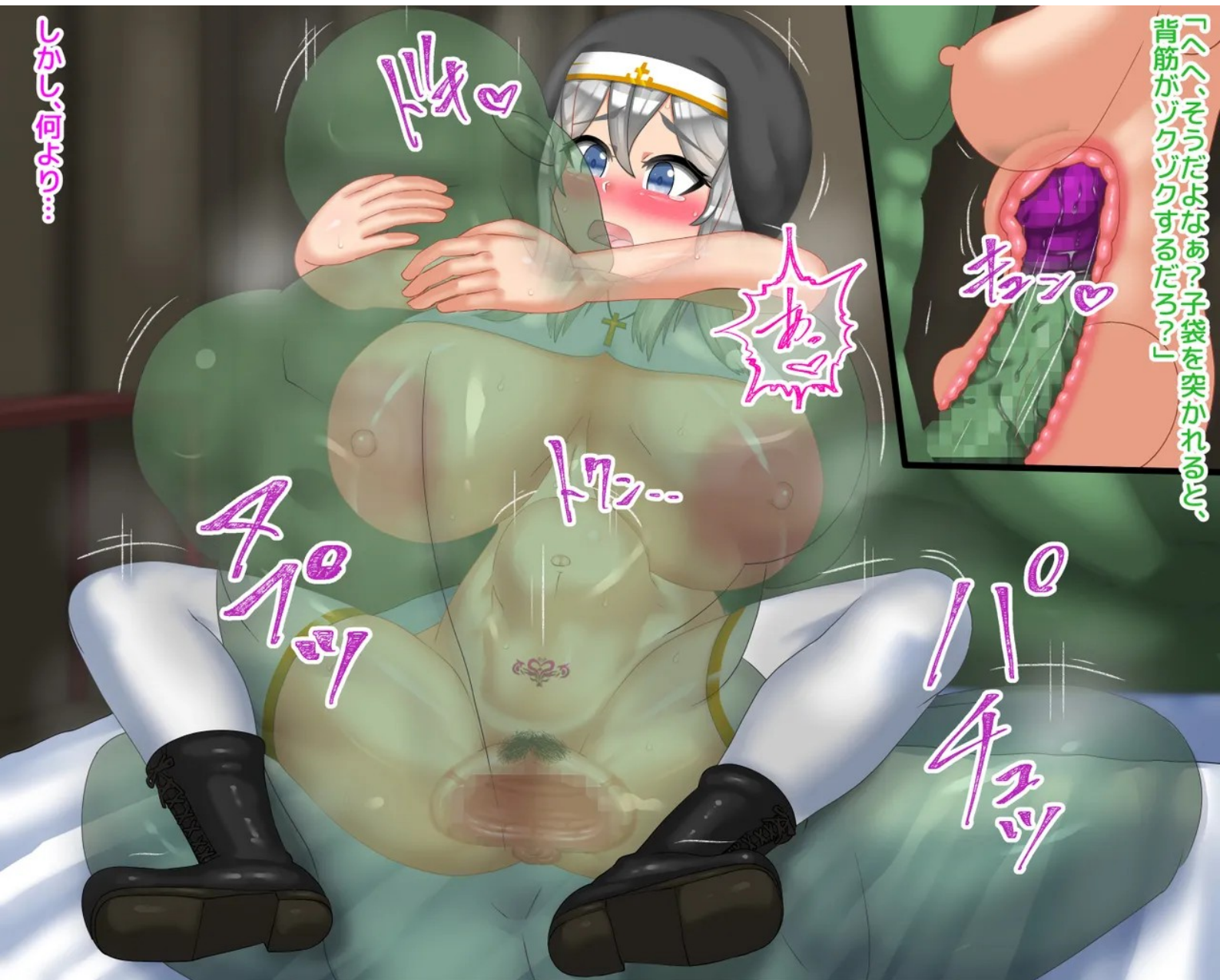
アッ
アッ
アッ

わっ
わっ
わっ

さほど管理は厳しくありませんが、
私達姉妹はお互いを人質として扱われ、
逃げ出すこともできませんでした……。



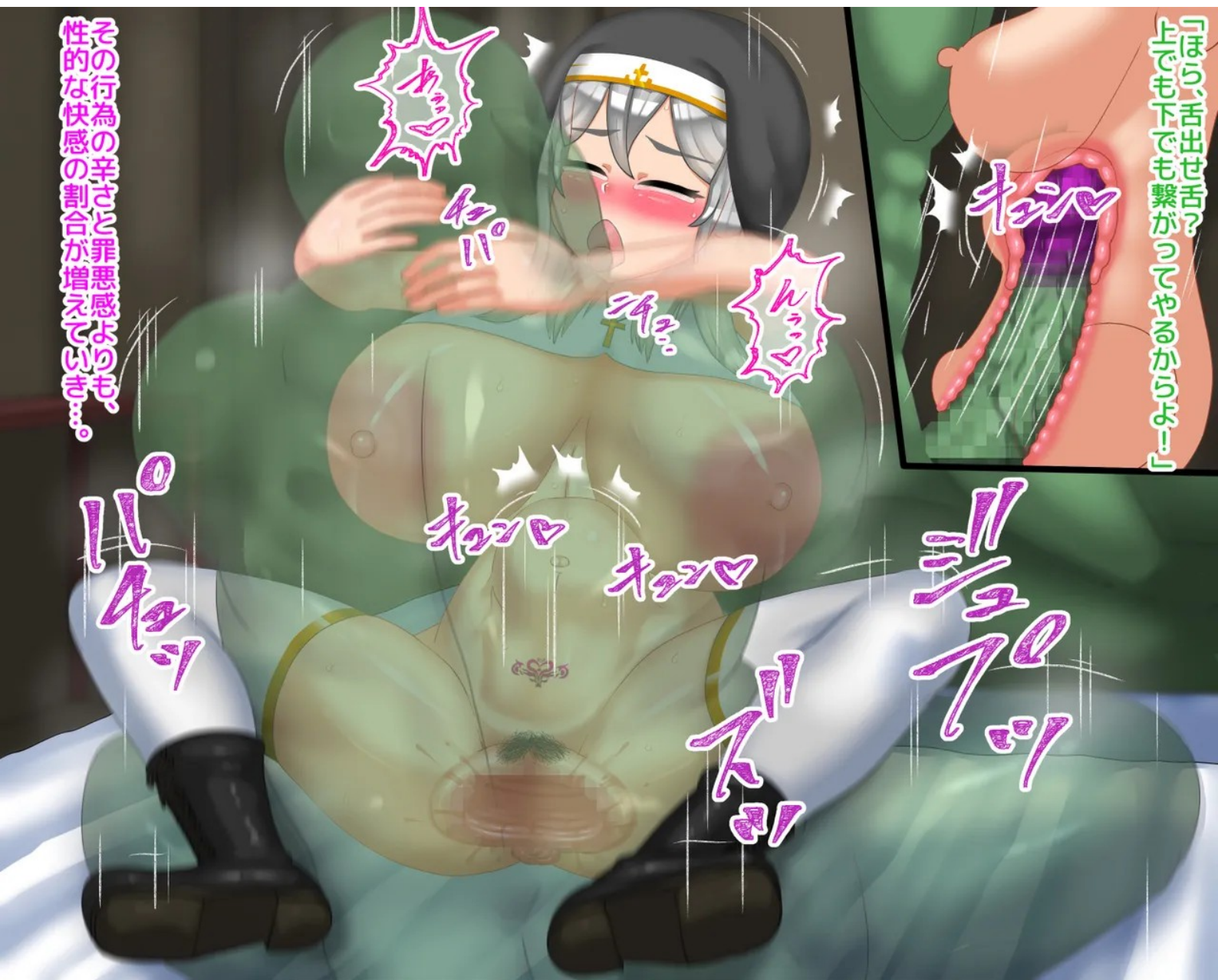
...おれ、かじ



「へへ、そうだよなあ？子袋を突かれると、背筋がゾクゾクするだろ？」



その行為の辛さと罪悪感よりも、
性的な快感の割合が増えていき...



「ほら、舌出せよ？」
「上でも下でも繋がってやるからよー」



「中に出すぞー！
オークの子を孕みやがれ！」

キュッ...♡

キュッ

キュッ

キュッ

キュルッ

キュッ

「へへ、なんだ？
終わったのにまだ離れるのが〜」

「う…はあ…♡
も、もう、う…♡
繋がってて…♡」

「やがてその罪深い行為こそを、
心待ちにするようになっていきました…。」



「いだあつー！
やめなさいよあつー！
二人同時なんて無理に決まってるでしょっー！」

「はあ？
無理かどうかはこっちで決めんだようー！」

「やあ？!!」

「あつー」

「ボロボロ」

「がッッ」

あたしは、お姉ちゃんと違って
反抗的だからって
ひどい犯され方をされるようになった...



「そっすだよー！
だいたい二人じゃなくて三人だぜ？」

「フハハ！
悪い奴だなお前！」

お姉ちゃんは、すっかり人が
変わったようになって、
いやらしい声をあたりに響かせるようになったわ…。



モッおっ!?

カパッ

ズッ

ズッ

ズッ

「本気でいくからな！
まだ死ぬんじやねえぞ！」

もうダメだわ...
—人で意地はあったって、
意味なんてない...
それに...

ガッ
ガッ

ガッ
ガッ

ガッ
ガッ

ガッ
ガッ

ガッ
ガッ

ガッ
ガッ





「おおっ？
こいつ、感じてやがるぜー」
「新しい扉開いちゃったか？」
ずっと見ないよつにしていた
罪深い行為は、退屈で平和な日々より、
遥かに刺激的で...

グロツ

おっ

グロツ

グロツ

グロツ

グロツ

グロツ



「よがれたご褒美だっ！
たっぷり飲みな！」

♡♡♡♡♡

ゴッゴッ

ムクムク

ゴッ

ゴッ
ゴッ
ゴッ
ゴッ
ゴッ
ゴッ



「あ、おねがい...♡
もっとのませて...♡
わたしの穴、つかっていいから...♡」

「へっへ、もちろんいいいせ。」

「Oどもは素直が一番だな。」

わたしの人格まで、
上書きしていくみたいだった...♡

グッ
グッ
グッ

ドキ♡

ドキ♡
ドキ♡
ドキ♡
ドキ♡

ドキ♡

ドキ♡

ドキ♡

ドキ♡



村の聖堂には、小さいながらも
女神様の像が焼け残っていて…
私達は、彼女の前で並んで犯されました…♡

「女神様とやらが見てる前で
ま〇こ突かれる気分はどうだめ？」

「うっ……♡
そんな事……
言えないっわよお……」

んっ♡

「お、お願いですっ♡
ここでは……
ゆるゆる……ください……♡」

トチクツ
ガッガッ

トチクツ

女神像は光り輝き、アルテリア様の
神々しい力がまだ感じ取れました……。

オラ
オラ



「今更取り繕う必要ねえだろ？
ここで信仰なんぞ捨てちまえよー」

「そっつだな！
それに呪いが強まれば、もっと気持ち良くなれるんじゃないかねえか？」

「えっ…♡」

「そ、そっつ…なのですか…♡」

私達は、すでに女神様の畏れ多さよりも
性欲の方が強くなっていました…。



ドク♡

ドク♡

ン

ン

アツ

アツ

「決まってるんだろー！
ほら！ここでちゃんと宣言しな！
女神なんぞ捨てて、
魔神さまの元へ下るってな！」

「え、あ……う……♡」

「わ……わたしは……♡」

「そんな事を……
して……しまつて……良いのじゃあ……か……」



「言わねえなら今すぐチ○ポ
抜いてやめなまこねー」

「そっかーさっさと言えー」

「は、はいっ♡
女神様、もっあたし達
あなたのが護なんて
いりませんっ♡」

「ずっと魔神様の元で
おま○こしてたいんですっ♡
だからアルテリア様はもう
必要ないですっ♡」



トキッ

トキッ

ズッ

グッ

グッ

グッ

グッ

「こっちはよっ♡
だいたい、退屈な修道女なんかより
おま○こしてる方が
ずっと楽しいもん♡」

「わたしたちは
交尾するだけの女に
なりたいたいです♡
聖女なんてやりたく
ありません♡」

ズッ
ズッ

ズッ
ズッ

ド
ド

ド
ド

ビュルッ
ビュルッ
ビュルッ



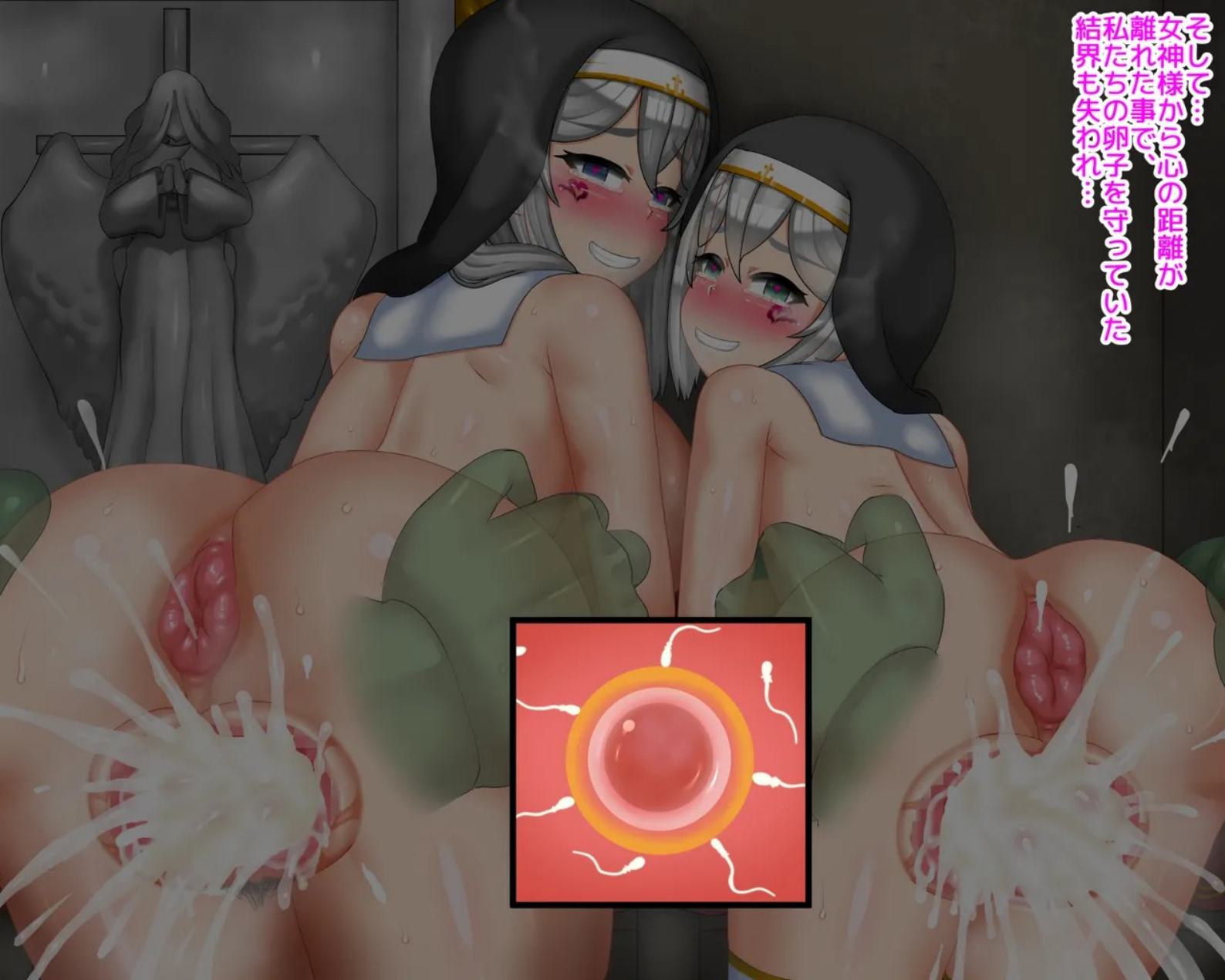
女神像はやがて輝きを失い、私達には新たな紋章と倍化した快感が与えられました…♡

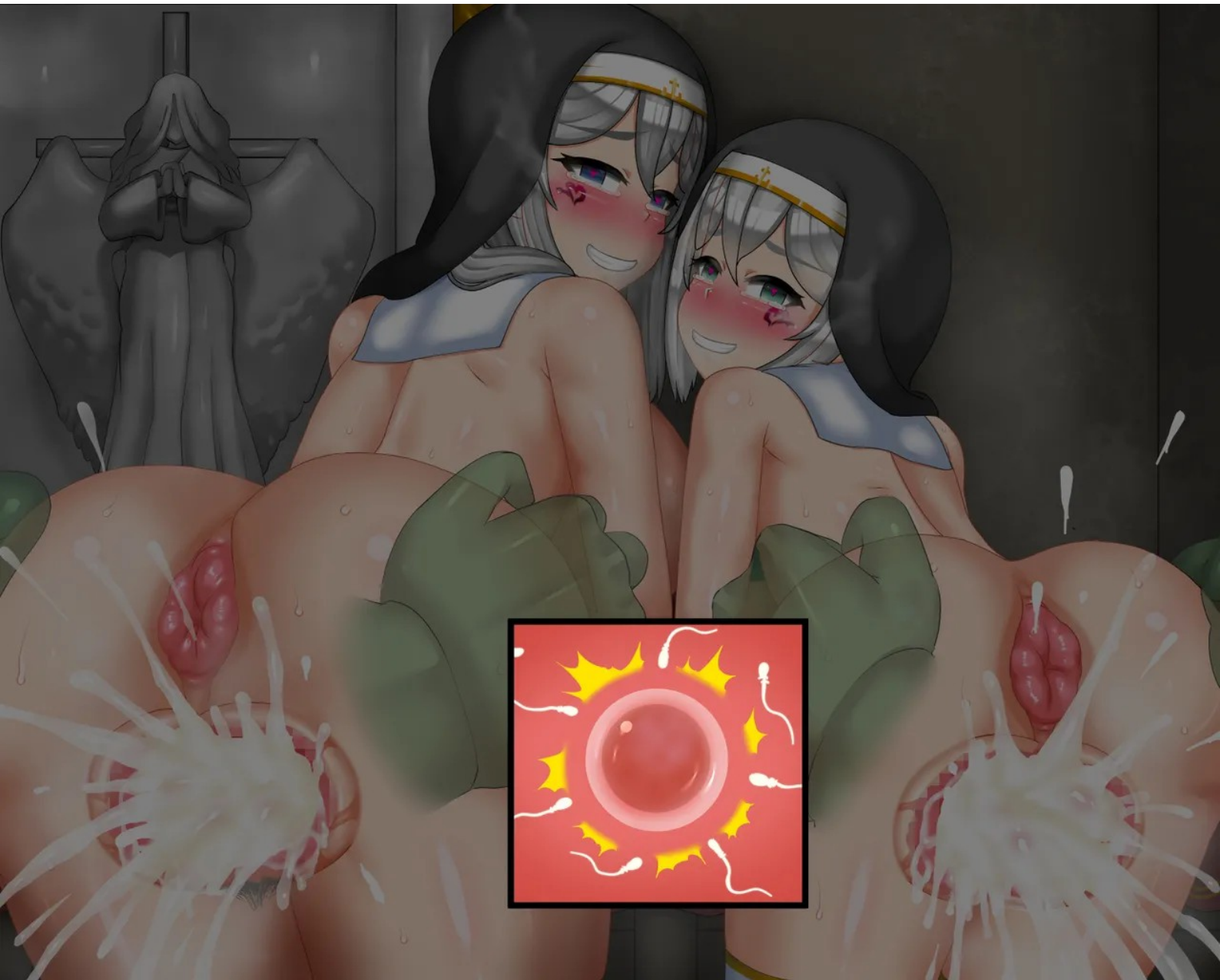
「よくやったな！
もう後戻りできねえぞ！」

もうその時すでに、身も心も魔族になつてたのかも…♡
かけられたその言葉が嬉しくて、たまりませんでした…♡

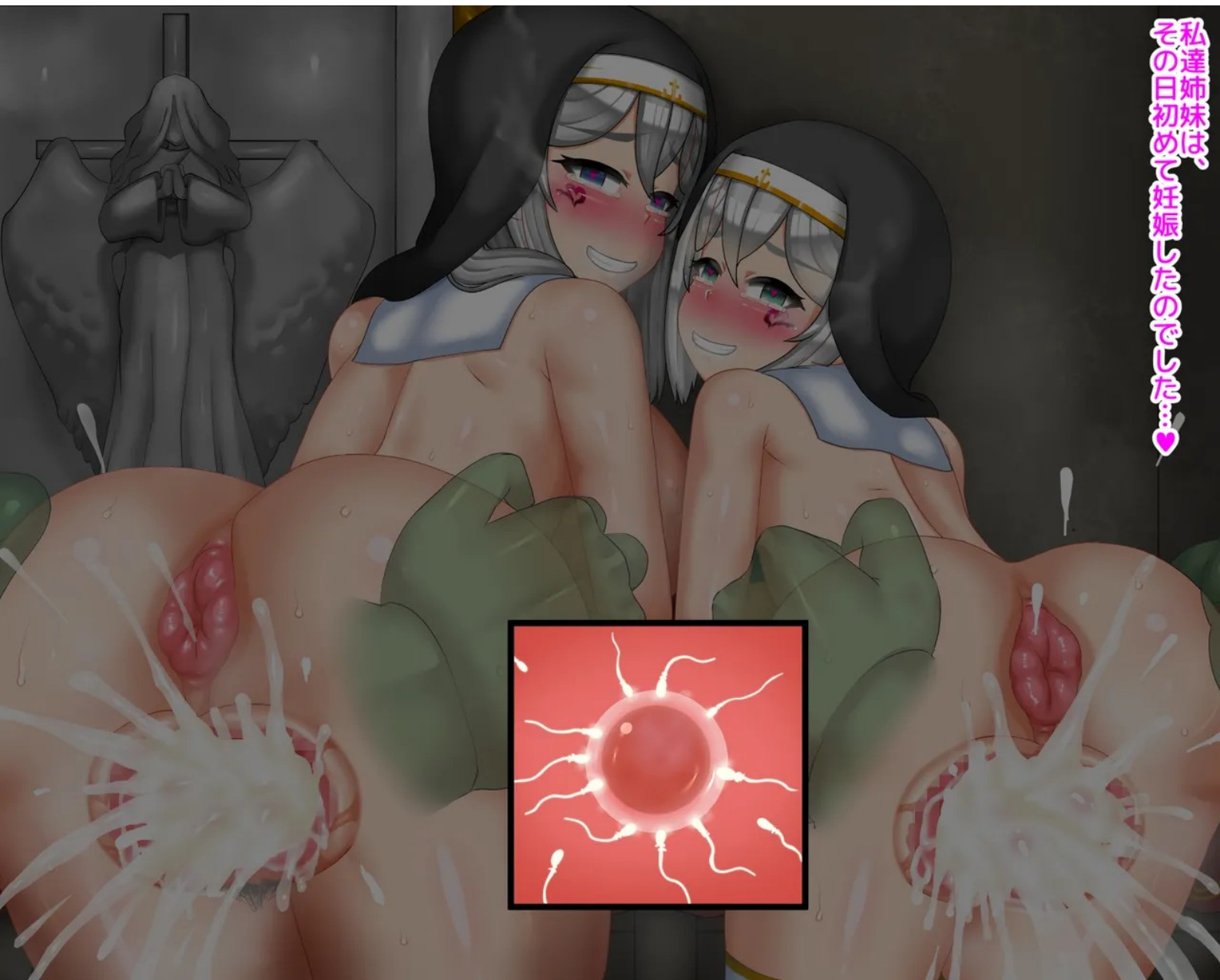


そして、心の距離が
女神様から、
離れた事で、
私達の卵子を守っていた
結界も失われ...





私達姉妹は、
その日初めて妊娠したのでした...♡



紋章の影響を受けた魔族の胎児は成長が早く、
三ヶ月ほどで姉妹は臨月相当の腹となった。



「ポテ腹見るとチ○ポバキバキになっちゃうぜ……!」

「もう……♡
赤ちゃんがいるのに、
あんまりですぎたら、
良くないですよ……♡」

「こんなグロマンになるまでやりまくった女がそれ言うかあ?」

「乳首には感度を上げるためのピアスを付けられ、女性器はベテランの娼婦のよう……その上、お腹まで大きくなった私たちが姉妹を見たら、誰もが目を疑うでしょう……♡」

アッ

アッ

ウフ……♡

ポテ……



「だってえっ♡
交尾するの、
きもちいいんですもの♡」

トクッ♡

「この前まで処女の
すじマンだったのになー
このま〇こで聖女は
サギだろー!」

ツクッ♡

ズッ♡

あはっ♡

ブルッ♡

ハッ♡



「へっ！
ずいぶん嬉しそうだな！
お前は天性のヤリマンだよー」

そう...
私は嬉しくてたまらない
のです...♡
聖女の義務から解放され、
たてた気持ちいい事に
溺れたお役目が...♡
今のお役目が...♡

かっ♡

ふっ♡

パン

んっ♡

んっ♡

パン



「あーっ
妊娠ま○こに
追加の子種やるぜー」

んくっ♡

カッ
カッ
カッ

おあっ♡
おあっ♡
おあっ♡

カッ
カッ

カッ
カッ



「へへ、ま○こ舐めてやるよ。」

「あは♡
使い古しの臭い真っ黒おま○こ、
舐めてくださったさうで
ありがとうございます……♡」

「しかしこいつ、
ずいぶんと
従順になったな。」

「子○ポ欲しくて
媚び売ってんだろ？
わがっつてやれよ。」

「トキ♡」

「へ○
へ○
へ○」

「トキ♡」



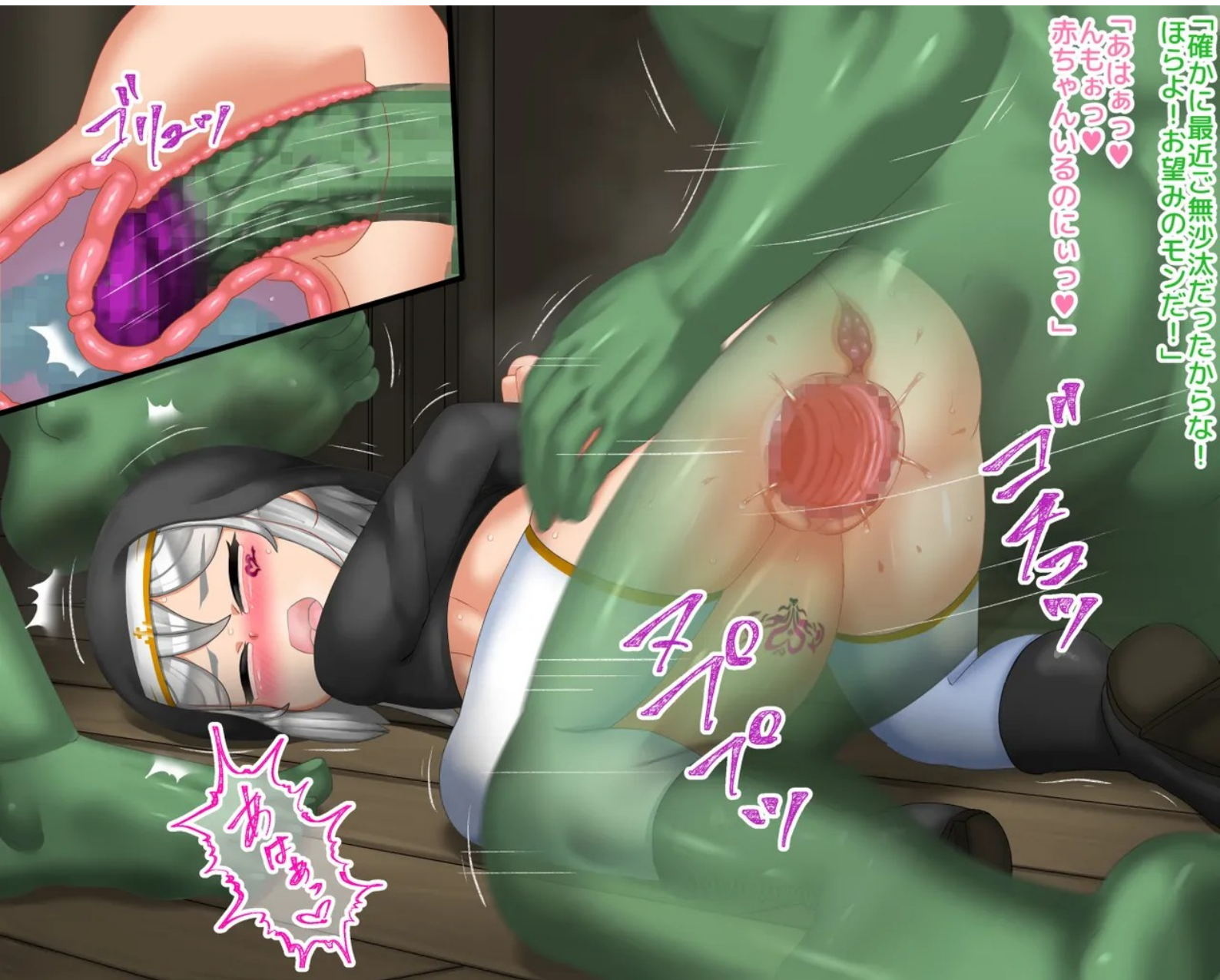
「確かに最近で無沙汰だったからな！
ほらよーお望みのモンだ！」

「あはあつ♡
んもおつ♡
赤ちゃんいるのじいっ♡」

ガクガク

アゲアゲ

あはあつ♡



「こんな巨マンチならわねえわん
拘束しとかなくても問題ねえな。」

「うんっ♡踏んでっ♡
踏まれながらの方が気持ちいいのっ♡」

「元聖女の言う言葉かよー
うははー!」

「すかをなくしたあたしは、
どんなりマソの変態女になっちゃった…
ド引きたしを見たら、きつとアルドは…♡」



グワッ

グワッ

グワッ

グワッ

グワッ

「中出ししてほじろかな？
ヤシマンガのガ〜」

「うんっ♡出してほじろね♡
熱いのごぼごぼ溢れるんぞ
ちようだいっ♡
赤ちゃん溺れちゃっろん♡」

！！
ン

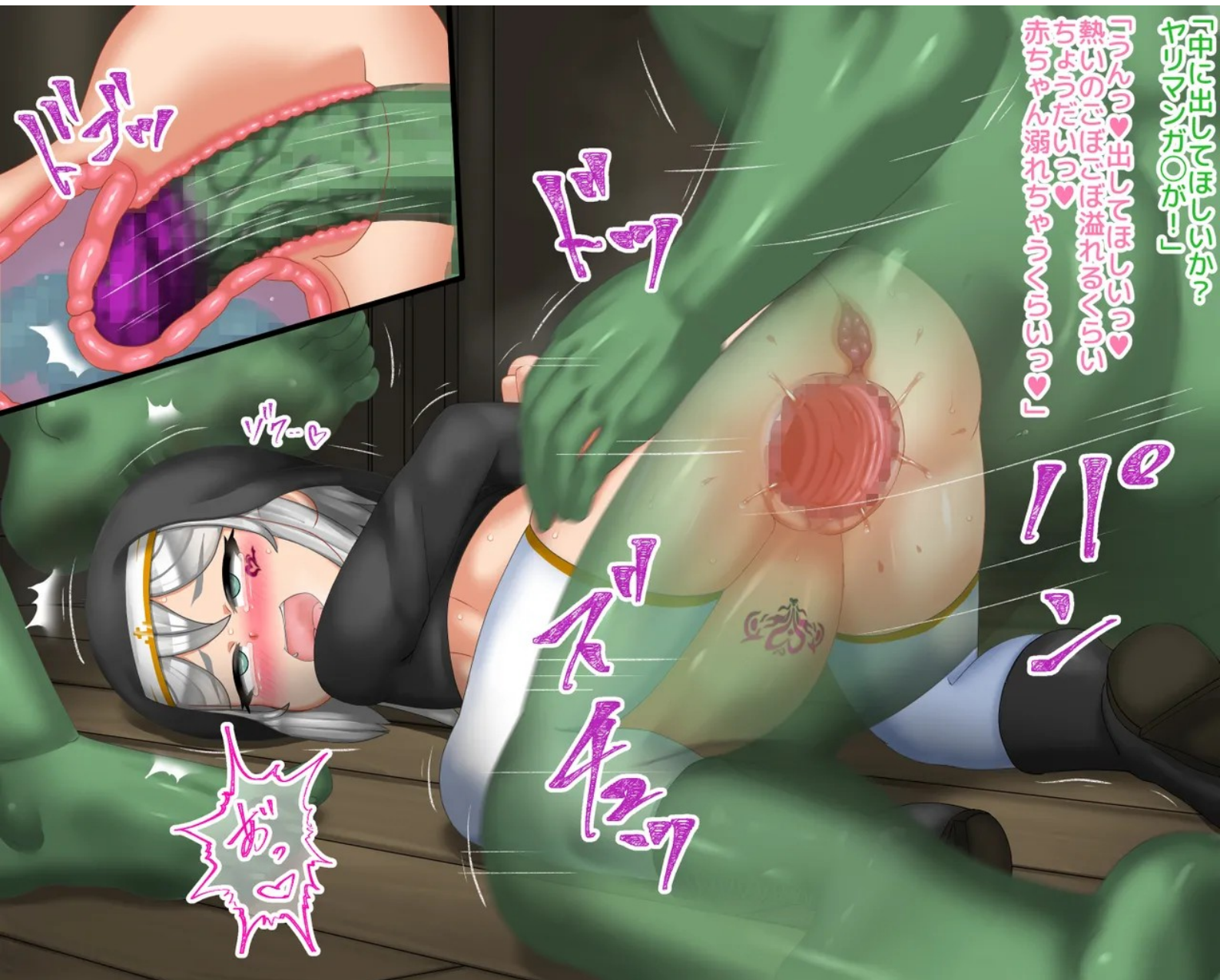
ドッ

ドッ
ドッ
ドッ

ドッ

♡♡

お♡



「覚えのいい腹へ」まの○に
ありったけ注いでやるよー

トビユッ

でも、こんな気持ちいいんだもの……♡
仕方ないじゃない……♡

こんな最高のお役目をくださった、
魔神さま……♡
ありがとうございます……♡



トイイッ



ハクッ

ハクッ

おん……♡

トイイッ
トイイッ



「グへへ…
すいぶん舌も
腰使いもこなれてきたな。」

「あなたたちオークに散々
仕込まれましたから…♡」

「教会に弟みたいなのが○を
残してきたんだろ？そいつに
今のお前を見せたらどう思うだろうな？」

魔族のガ○を孕んだまま、よがりまくって……」

「いやあつ♡
いやわないでえっ♡」





「へへー黙ってほしけりゃ
下品な舌使いで黙らせるんだなー」

「んうっ♡ひどい人...♡」

グロリアン

はっ♡

やっ

ちゅっ

はっ♡

はっ♡

アッ

はっ♡

ああ...♥
なんて、気持ちいいのよ...♥

肉欲に溺れて、殿方の大きな身体へ
身を委ねるのは...♥

んあぁ...♥

セキ...

ごめんなさい、
アルド...♥
私は、もうあなたの知ってる
女じゃありません...♥

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ
アッ
アッ



「くく、俺等とやっつて
ひいひいイッてるようじゃ、
魔神さまの相手なんぞ
できねえぞ? せいせい励んで
鍛えるんだな。」

ああ…♡

私に素晴らしい祝福をくださった
魔神様、早くあなたと繋がりたいです…♡

トキ♡

ああ…♡

めろっ

んっ♡

ちゅっ♡

んっ♡

んっ♡
んっ♡



「ああんっ♡
上と下で同時に犯されるの、
だいすきいっ♡」

「無理だのなんだの
めんどくせえ事言ってたガ○が、
ボテ腹になつたら随分
変わったもんだな!!」

「ああんっ♡」

「ああんっ♡」

「ト
ゴ
ゴ
ッ」

「ガ
ス
ッ
ッ」

「ク
ク
ッ
ッ」



「元々その気があったから
虚勢張って誘ってたんだろ？
ほらよー！
喉もちゃんと犯してやるよー！」

ガッ
ガッ

キッ
キッ
キッ

キッ
キッ
キッ

ホッ
ホッ

ドク
ドク



ああ……♡
呼吸できなくて、苦しい……♡
モノみたいに扱われるの、すき……♡

「こいつ、更に変態マツになったな！
息が詰まるのがそんなに
気持ちいいのー？」

「ああ、こいつはマジモンだな。
これは……」

「ボルガリアさまはこっちの変態ガ○を
選ぶかもしんねえな！」

え、そ、そんな
あ……あたしが……♡♡



お姉ちゃんの後をついていくだけだった、
あたしが...♡

あたしは、よくわからない嬉しさと優越感と
色んな気持ちで混ざって、
いつもよりずっと気持ち良くなっちゃった...♡



フク♡

ハッ♡

フク♡

ハッ♡

フク♡

ハッ♡

フク♡

ハッ♡

フク♡

フク--♡

「こおれ！
優秀なま○こガ○に
腹いっぱいご馳走してやらあー」

がほっ

びんー

がほっ
がほっ
がほっ

びんー
びんー





「ごぼ...
ねえ、もう一発...くらい...
して...くれない...くれません...
もつと、酷いことされて、
気持ち良くなりたいの...♡」
「~~~~いせー?
~~~~もやっつさるよー」

ハッ...♡

ハッ...♡

ハッ...♡

ハッ...♡

ハッ...♡

それは、すでに破水して、  
出産が秒読みだった時…  
あたしたちは、その時も犯されてた…♡

「そっつー！クソ女神に  
今のお前たちの事を教えてやんなー！」

「は、はい…♡」

あっ♡

んっ♡

「お、私達は、いま…♡」

アッ♡

アッ♡

アッ♡

アッ♡







「お望み通り  
中出しだつー！しっかり飲んで、  
産みやがれ！」

ガッパッパッ  
♡

ガッパッパッ  
♡

ビュルッ  
ビュルッ  
ビュルッ  
ビュルッ

ド  
ド



男根を引き抜かれた穴から、  
精液が滝のように溢れ出したわ……♡

あ……♡

あ……♡

きつと、精液と羊水が混じって  
噴出してたのじゃない……♡  
まるで、私たちも射精してらる……♡



そして、精液を吐き出した子宮は、  
最後に赤ちやんを露出させたの……♡

あひゅっ♡

ドクン---♡

あひゅっ♡

ドクン---♡

それは、魔族になった私たちが  
今度は母となる、記念すべき瞬間……♡



「でるっ♡  
あかちゃん、でちゃうっ♡  
みてえっ♡うむっ♡みてえっ♡」

♡♡♡♡♡

おおっ♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

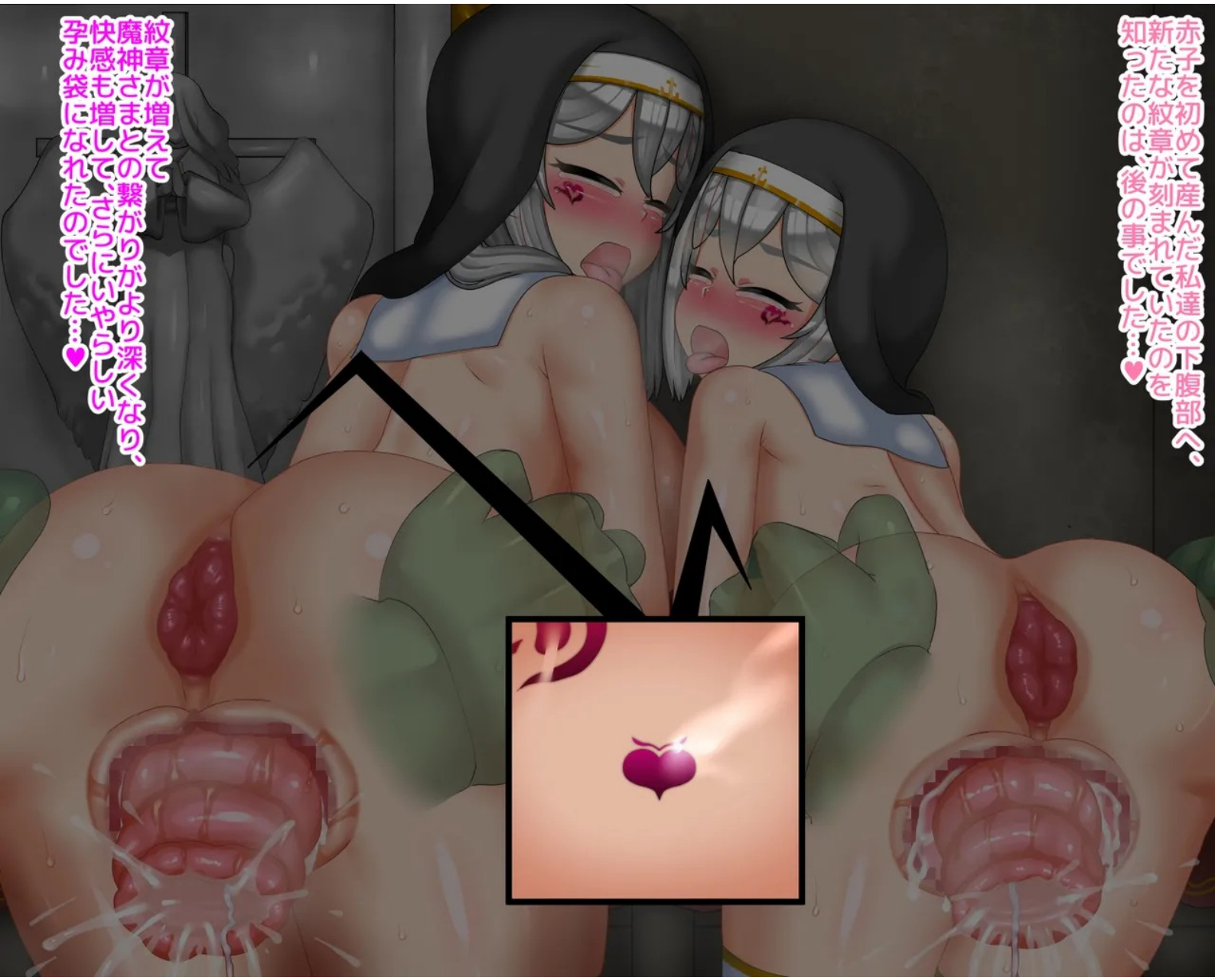
おおっ♡♡♡♡♡

「みてくさいっ♡  
女神様♡オークさま♡  
聖女だっ♡わたしたちが、  
魔族の母になるところをっ♡」



赤子を初めて産んだ私達の下腹部へ、  
新紋章が刻まれていたのを  
知ったのは、後の事でした...♡

紋章が増えて  
魔神さまとの繋がりがより深くなる、  
快感も増して...♡  
孕み袋になれたのでした...♡





それから、またしばうくして…  
もう一度私達が妊娠し、お腹が大きくなった頃…  
ボルガルア様のところへ連れてこられました…  
そう…どちらかが、この方の伴侶に選ばれるのです…。

「はいです、魔神さま。いつごろ、なかなか  
仕上がらないうしやない？」

「ふむ…そうだな。  
どれ…腹を見せてみる…。」

「わかりました…♡」

「ドキ♡」

「ドキ♡」

「ドキ♡」

「なるほど...これはいい。それに、清かった信仰の力も  
すつかり魔族の洗んだものへすり替わっている。  
どこに出しても恥ずかしくない魔族だ...」  
「これなら、私の分身を産む事も  
可能だろう...。だが...

「どちらがより、ふんわりしてだらうかな?」

「ポルガルアさまあ...♡おねえちゃんより  
わたし、わたしの方がずっと  
マゾで信仰心を捨ててますよう♡」

「いいえっ!」  
「私の方が妹よりずっと  
淫乱でおま○こも伸びるから  
なんでも受け入れられますっ♡」



はぁ...♡

はぁ...♡

ドキッ♡

アッ

アッ

ムフマ...

ドキッ♡



「よし、…ミルカ。そなたを我の伴侶としよう…。」

「う、うれしい…♡  
たくさん、神様の赤ちゃん  
産ませていただきますっ♡」

トキッ♡

「ちょ、ちょっと待ってください…！」

「私は!?! 私にも、お情けをください…！」

「私は思わず取り乱してしまいます…。」

そんがッ

スッ

「うむ…エミリア、そなたにはこやつの子を孕んでもらおうか。」

魔神様の後方の林から、天を衝くような大男が現れました…。なんと、暴力的な姿…。それに、ボルガリア様に似た瘴気の香りが漂ってきます…♡

「我の触手の半分…半身を消費して創り出した眷属のサイクロパスだ。ボルシヤスと名付けた。いわば我の兄弟のようなもの…。そなたはこやつに伴侶となつて子を産み育てるがよい…。」

「うが…これがわ、我の…妻か。気に入った…。」

「ああ…♡ボルシヤス様…♡なんと、たくましく雄々しい…♡謹んで伴侶にならせていただきます…♡」

「よかつたね…♡お姉ちゃん♡」

私たち二人の、新たな生活がこの日から始まりました…♡

ズン…



私はボルガリア様の伴侶になる準備のため、  
棲家である湖へ連れてこられました…♡

「主ではこのオークの赤子を産んでからだ…。  
こやつも大事な手下の一人だ。  
我が取り出してやるろう…。」

「ありがとうございます…♡  
ボルガリア様…♡」

ああ…愛する方の手が、  
あたしに…♡



「...これがあなたの子宮か。」

〇〇〇でありながら強弱で柔軟...  
順調に、魔族へ寄っているな...  
だが...

お腹の中、内臓を弄られるのは  
ぞわぞわするような感覚です...





「そろだ。そろそろ赤子を産ませてもらおう。」

「子宮口の開きを助けてやれば...。」

「あぁ...あぁ...♡」

「トクッ...」

「ハリッッ」

「ガッ  
ニッ  
アッ  
ツ」

「私の子宮から、生暖かい羊水が溢れ出します...♡」



「全てを我に委ねよ…」

「あなたはそのまま、快楽を貪るがいい。」



私は言われるがままに、  
何の心配もなく赤ちゃんを産みながら  
絶頂を迎えました…♡

「…よく悦びのままに産んだ。元気な赤子だ…。」

オークども、二人を連れ帰れ。  
種付けはまた明日としよう…。」

ムクッ  
やっぱり、赤ちゃん産むの…  
気持ちいい…♡

「はっ！わかりました!!  
ボルガリア様!!」

